

平成25年度 国際教育推進委員会活動報告

著者	工藤 泰三, 石井 克佳, 加藤 衛弘, 小林 美智子, 福原 行也, 金城 幸廣, 建元 喜寿, 今野 良祐, 高良 正輝
著者別名	Kudo Taizo, Ishii Katsuyoshi, Kato Morihiko, Kobayashi Michiko, Fukuhara Yukiya, Kinjo Yukihiro, Tatemoto Yoshikazu, Konno Ryosuke, Takara Masaki
雑誌名	研究紀要
巻	51
ページ	53-58
発行年	2014-07
その他のタイトル	An Annual Report on the Committee of International Studies 2013
URL	http://hdl.handle.net/2241/00123695

平成25年度 国際教育推進委員会活動報告

国際教育推進委員会

工藤泰三・石井克佳・加藤衛拡・小林美智子

福原行也・金城幸廣・建元喜寿・今野良祐・高良正輝

近年各方面で声高に叫ばれているグローバル人材の養成を目指し、筑波大学附属坂戸高等学校では学校の特長を生かしながらさまざまな国際教育・ESDの取り組みを行っている。これらの取り組みは実を結びつつあるが、活動を通しての生徒の変容の測定においてはまだ課題が残る。

キーワード：国際教育 ESD(持続発展教育) 校外学習 教科「国際」 ユネスコスクール

1. はじめに

筑波大学附属坂戸高等学校(以下「本校」)では、平成20年に校内の国際教育推進委員会(Committee of International Studies、以下「CIS」)を設置し、それ以来本校独自の取り組みである「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」をはじめ、インドネシア・タイ・台湾などにある学校との交流、ユネスコスクールへの加盟、学校設定教科「国際」とその科目の設置などを通して、総合学科高校だからこそ可能である多角的な国際教育のあり方を模索しながら、次の3つを国際教育の基本コンセプトとして国際教育を推進している。

①「3F」で終わらない、深みのある国際教育を：Fashion, Food, Festival をネタにして盛り上がるだけの「その場限りの交流会」にとどまらず、「知る」から「考える」へ、そして「行動する」へとつながる活動にしたい。

②本校の、あるいは総合学科の特長を活かした国際教育を：総合学科高校だからこそ持ちうる農業・工業・家庭・福祉・商業などのいわゆる専門教科の知見を活かし、各教科の教員が連携しながら多面的に進める活動を実践していきたい。

③一部の教員だけが関わるのではない、たくさんの教員が関わる国際教育を：特定の教員のみが進めるのではなく、教科の枠を超えて、より多くの教員が主体的に関わる国際教育を展開していきたい。

本論では、これらのコンセプトに基づき、通常の授業の中で、あるいはその目的を達成するための手段として行事を設けるなどしながら国際教育に取り組んでいる。

さらにCISでは、近年ようやく認知度が高まってきているESD(持続発展可能な社会づくりのための教育：Education for Sustainable Development)にも力を注いでいる。ESDと国際教育は切っても切れない間柄(図1参照)であり、国際教育に関する活動を行う際はESDの視点が欠かせない。実際、文部科学省(2005)においても、国

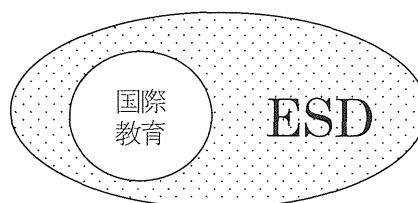


図1 ESDと国際教育の関係
(本校の第16回総合学科研究大会資料集より)

際教育は「国際化した社会で、地球的視野に立って、主体的に行動するために必要な態度・能力の基礎を育成するための教育」と定義されており、国際教育においても単に「外国のことを知る」にとどまらず、生徒の視野を広げながら、これからのグローバル化社会において日本人を含む世界の人々が平和に暮らせるために自分たちは何をすべきか、どう生きていくべきかを生徒に考えさせていく取り組みをしていかなければならない。この思いを具体化するものとして、本校では次節以降にあげるさまざまな取り組みを行っているのである。

2. 平成25年度の本校における具体的な活動内容

2.1. 国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム

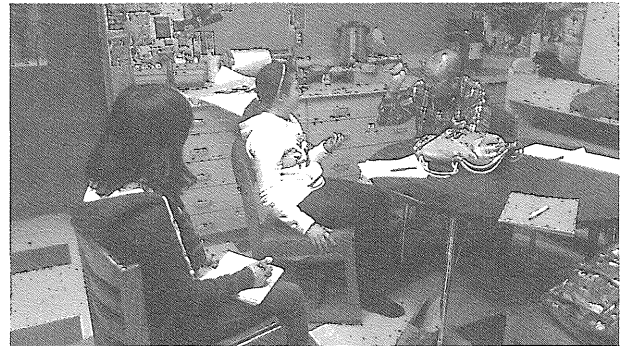
平成20年度より実施しているこのプログラムは、3年次の学校指定必修科目「卒業研究」で国際的なテーマを扱う研究を行う（または行おうとしている）生徒に対し渡航費の援助を行うものである。20年度から24年度までの5年間で計29名の生徒がこのプログラムに応募し、うち8名の生徒を引率教員とともに海外の各国へ送り出してきたが、25年度においては2年次生を対象に募集した結果、5名の生徒が応募した。なお、それぞれの生徒の研究テーマと応募理由は下記の通りであった。

表1 平成25年度「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」応募生徒の研究テーマ一覧

生徒	研究テーマ	応募理由
A	シンガポールの英語教育	公用語を4つ持つ同国において成果を上げている英語教育を、現地の人々の生活とのかかわりを考慮に入れながら調査する
B	オリンピック報奨金から見る各国の事情	報奨金が最も高いと言われるシンガポールに焦点を当て、同国におけるスポーツの在り方と歴史・経済との関わりを考える
C	日本にJSLを導入する	アメリカで行われているESL (English as a Second Language) プログラムを調査し、日本における日本在住の外国人のためのJSL (Japanese as a Second Language) プログラムの導入方法を考える
D	農薬と輸入農作物の安全性	海外の製薬会社を訪れ農薬の成分や種類、安全性テストの内容などを調査するとともに、現地の農家の人々が持つ農薬使用への意識を調べる
E	タイの日本語教育	タイで行われている日本語教育の実情を調査し、タイで日本語教育が行われる意義や、教師不足などの問題点などについて考察する

CISにおいて「海外への渡航により卒業研究の深化が十分期待できるか」「費用に問題はないか」「実現可能性は十分か」などの観点から書類及び各生徒によるプレゼンテーションにより選考を行った結果、生徒A・C・Eの3名を支援対象とすることに決定した。生徒Cは1月にアメリカに、生徒A・Eは2月にシンガポール・タイに渡航し、現地の学校（中学校・高校・大学）などを訪

問し調査活動を行った。なお、3名の生徒の活動については、本校主催の第17回総合学科研究大会（2014年2月20・21日）において生徒たち自身が報告を行った。



アメリカでESLの実際を見学する生徒C

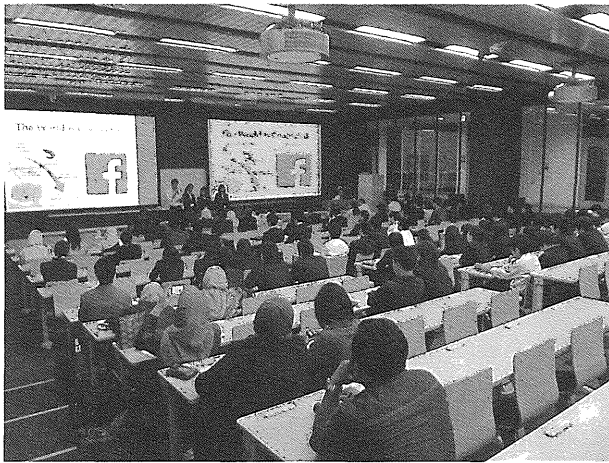
2.2. 高校生国際ESDシンポジウム@坂戸2013

これまで本校と交流実績を持つ海外校との交流を深めて生徒の国際的な視野を広げるとともに、持続発展可能な社会を目指して地球的課題に主体的に取り組む姿勢を涵養することを目的として、3ヶ国5校の生徒・教員を招待し、本校の生徒・教員とともに持続発展可能な社会づくりに向けたシンポジウムを開催した。このシンポジウムでは各校の生徒によるプレゼンテーションやディスカッションとともに、本校生徒による日本文化紹介、海外生徒による各国の文化紹介も行い、生徒同士の相互交流を深めることができた。また海外からの参加者（教員・生徒とも）は本校生徒の家庭に3泊4日のホームステイをし、校外でも異文化理解を深めた。

昨年度の「高校生国際ESDシンポジウム@坂戸・つくば2012」では筑波大学農林技術センターが主催する「国際農学ESDシンポジウム」と関連付けての開催だったため、参加生徒によるプレゼンテーションのテーマを環境問題に限定していたが、今回は同シンポジウムとは関連付けず単独での開催としたため、環境問題に限らず、持続発展可能な社会づくりに結び付くテーマであれば扱う問題は限定しないこととした。しかしながら、昨年度は環境問題に限定したシンポジウムであったこと、また環境問題は具体的に扱いやすいテーマであることから、今年度も環境問題を扱う学校が多かった。参加校および各校のプレゼンテーションのテーマは次の通りであった。

- 筑波大学附属坂戸高等学校（日本）：「高校生の地球的課題への関心と海外留学への関心を高める取り組み」

- ボゴール農科大学附属コルニタ高等学校（インドネシア）：「手軽にできるゴミの再利用」
- ワタナー・ウィタヤー・アカデミー（タイ）：「校内で行っている環境改善のための取り組みとその成果」
- フィリピン大学附属高等学校（フィリピン）：「ヒマワリの葉を使ったフザリウム立枯れ病の予防」／「グアバ葉の抽出物を利用した血糖値の抑制」
- 林業省林業教育センター附属高校カディパテン校（インドネシア）：「カディパテンにおける環境の悪化とその改善のための取り組み」
- カセサート大学附属高等学校（タイ）：「活性炭や酸化チタンを用いた水質浄化」



高校生国際ESDシンポジウム@坂戸2013
プレゼンテーション・セッションの様子



お互いの国の文化も紹介しあう
(写真はフィリピン大附属高チーム)

各校からのプレゼンテーションの後には、「持続発展可能な社会づくりのために高校生ができること」をテーマ

に参加者によるパネルディスカッションを行い、各校の生徒はそれぞれが持つ考えを共有し、その経験をそれぞれの国に持ち帰ってさらなる取り組みにつなげることを誓い合った。

なお、本シンポジウムは「日・ASEAN 友好協力40周年」記念事業として外務省に認定された。

2.3. 学校設定教科「国際」の実践

本校では平成23年度入学生の教育課程より、学校設定教科「国際科」を設置し、本校の国際教育の核を担うべく下記の4科目を設けている。24年度に2年次科目の2つがスタートし、続いて25年度には3年次科目も合わせ4科目すべての実践が始まった。

- 「国際社会」（2年次選択）：英文記事の読解を通して世界の諸相に触れるとともに、日本・外国文化や国際的課題についての調査および英語でのプレゼンテーション活動を行い、国際的な課題に対して考察・行動するための基礎を養う。なお、詳細については工藤・塗田（2013）を参照されたい。
- 「Discussion & Debate」（2年次選択）：日本語および英語によるディベート・ディスカッション活動を通じて、多文化共生社会の中で諸課題に対して主体的に考え行動するために必要な議論・討論のスキルを身につける。なお、本科目の詳細については本研究紀要において別途紹介する（工藤（2014））。
- 「Global Studies」（3年次選択）：現代の世界に生じているさまざまな問題について、ゲーム・議論・作業・レポートや小論文の作成（コンクールへの応募を含む）・校外での活動・海外生徒との交流活動など具体的な活動を通して多角的・多面的に考察する。
- 「比較文化論」（3年次選択）：日本の文化と諸外国の文化のいくつかを取り上げ、「衣・食・住」「聖と俗」などをキーワードに多角的・歴史的・思想的に比較することを通して、「芸術とは何か」「文化とは何か」「現代文明とは何か」などについて考察し、柔軟な思考力・表現力・発表力を身につける。

2.4. 海外校外学習の分散実施

2 年次生対象の海外への校外学習の渡航先を、従来の 160 名全員が 1 か所に行くという形から、25 年度には 3 ヶ所に分かれて行くという形に改編して実施した。グループの規模を小さくして生徒一人一人の活動への関わりを深めながら、海外の交流校との交流を継続的なものとし、かつ本校生徒と現地校生徒との協働学習活動を実現することがねらいである。

25 年度に校外学習を実施した国・地域とそれぞれのグループの主な活動内容は次の通りである。なお、詳細については本研究紀要において別途述べる（今野・建元・工藤（2014））。

- オーストラリア（参加者 95 名）：2 泊 3 日のファームステイ、ケアンズ市内でのクイズウォークラリー、アボリジニ文化体験、またオプションでキュランダ高原やグリーン島などの観光を行った。
- インドネシア（参加者 10 名）：本校の姉妹校であるコルニタ高校の生徒宅での 3 泊 4 日のホームステイに加え、ボゴール市のゴミ処分場、グヌングデパンランゴ国立公園、タマンサファリなどの視察をコルニタ生とともにに行い、環境問題について学びあった。
- 台湾（参加者 55 名）：本校と交流実績のある新民高級中学（台中市）生徒宅での 2 泊 3 日のホームステイに加え、新民高中の授業への参加、「日本と台湾の自然」「いのちを守る防災のあり方」「漢字文化」の 3 つをテーマとした協働学習などを行った。

2.5. その他の国際教育活動

これまで紹介した活動に加え、本校では多面的・多角的な国際教育の展開のためにさまざまな活動を行っている。主なものを下記に挙げる。さらに細かくは資料 1 を参照されたい。

- ユネスコスクールとしての活動：2005 年から日本の提案によって始まった「ESD の 10 年」は 2014 年に最終年を迎える。同年には岡山県において ESD に関する政府閣僚級国際会議が開催されるとともに、世界 33 カ国の高校生による国際会議も予定されているが、その準備として催された「第 2 回アジア・太平洋高校生 ESD フォーラム」に本校生徒 2

名が参加し、他校生徒と交流をしながら ESD 活動への理解を深めた。

- 留学生の受け入れ：24 年 9 月～25 年 7 月にスイスから 1 名、25 年 4 月～7 月にドイツから 1 名の留学生を受け入れ、同 9 月からはもう 1 名のドイツからの留学生が本校で学んでいる。また短期ではあるが、25 年 10 月～11 月には前述のコルニタ高校から 3 名の生徒が約 1 か月間、26 年 1 月には(社)協力隊を育てる会主催（ライオンズクラブ後援）のインドネシア・日本学生交流事業の一環として国立マタラム第一高校の生徒 10 名が 1 週間本校に滞在した。外国からの生徒が日常の学校生活を本校生徒とともに過ごすことにより本校生徒の異文化受容力を高めることができるという期待のもと、今後も積極的に外国からの留学生を受け入れていきたいと考えている。
- 本校生徒の留学の推進：24 年度からアメリカに留学していた生徒 1 名が 25 年夏に帰国、広報紙にコメントを書いてもらったり、後輩の授業で話してもらうなど協力してもらうとともに、前述の「高校生国際 ESD シンポジウム」では発表者として参加してもらった。現在は 1 名がニュージーランドに留学中、加えて 1 年次生 1 名が 26 年 3 月から、もう 1 名が 7 月から同じくニュージーランドに留学予定である。さらには、卒業後に海外の大学に留学すべき準備を進めている 3 年次生が 2 名現れるなど、生徒が「海外での学び」を現実的に意識する雰囲気が高まっている。
- 教員の国際的活動：5 月にはインドネシア政府、ユネスコジャカルタ、KOICA（韓国国際開発機構）主催の Green Schools Asia Regional Workshop（於：インドネシア・ジャカルタ）に本校教員 2 名が参加し本校の ESD 活動について発表を行った。また 12 月には第 5 回ユネスコスクール全国大会（於：東京都多摩市）に 3 名、今後参加予定のユネスコ主催「ESD Rice Project」に向けたワークショップ（於：タイ・アユタヤ）に 1 名が参加するなど、教員も積極的に国際教育・ESD の実践のための活動を行っている。
- 国際教育活動の効果の検証：附属学校教育局プロジェクト研究 4「子供の国際的資質を育てる実践」（座長：甲斐雄一郎教授）において、本校で実施している海外校外学習の効果を実問紙調査（実施前と実施後に同様の調査を行うことで生徒の変容を測る）に

より検証する作業を進めている。今後は校外学習のみならず、さまざまな国際教育活動が生徒たちにどのような変容をもたらしているのか検証を進めていきたい。

3. おわりに

CIS が発足して6年が経過した。これまで CIS 委員のみならず校内外の多くの先生方・生徒たちに協力をいただきながら多様な活動を行ってきた。多くの皆様への感謝を申し上げるとともに、今後も多くの人々とのつながりを大事にしながら、より一層の国際教育・ESD の発展に尽力していきたい。

今後の最も重要な課題は、それぞれの活動が生徒にどのような変容をもたらすのかを明らかにする研究を進めることであろう。国際科の各科目の実践や校外学習の分散実施については研究が進んでいるが、「国際的視野に立った卒業研究の支援プログラム」や「高校生国際ESD シンポジウム」などの取り組みについては、卒業後の生徒たちの活動を追跡調査する必要があり、今後の研究の進展を自ら期待したい。

【参考・引用文献】

- 工藤泰三ほか (2013). 平成 24 年度国際教育推進委員会活動報告. 「研究紀要」第 50 集、pp. 57-62. 筑波大学附属坂戸高等学校.
- 工藤泰三・塗田佳枝 (2013). 科目「国際社会」の開発～国際的視野を持った生徒の育成を目指して～. 「研究紀要」第 50 集、pp. 79-96. 筑波大学附属坂戸高等学校.

【資料1】平成25年度 国際教育・ESD 活動一覧

4月	「世界一大きな授業」Global Studies で実施
5月	Green Schools Asia Regional Workshop (GSARW) 教員発表
6月	ALT を活用したイングリッシュルーム (昼休み・放課後等) の開始
6月	国際ソロプチミスト埼玉 第7回ユース・フォーラム 生徒出場
7月	スイスからの留学生 (1年間)・ドイツからの留学生 (3か月間) 帰国
7月	3年生1名アメリカ留学 (1年間) から帰国
8月	国際ソロプチミストアメリカ 第8回日本東リジョン・ユース・フォーラム 生徒出場
9月	ドイツからの留学生来校 (2014年7月まで)
9月	2年次総合「インドネシア班」インドネシア・ショップ黎明祭出店
9月	Uniqlo「服のチカラ・プロジェクト」54箱2000着以上の服を校内で回収・発送
10月	「高校生ESD国際シンポジウム@坂戸2013」開催
10月	姉妹校コルニタ高校から3名の留学生が来校 (4週間)
11月	「国際ユース作文コンテスト (五井平和財団・ユネスコ共催)」入賞
11月	生徒有志がフィリピン台風被害に対する募金活動を実施
12月	「第5回ユネスコスクール全国大会」教員参加
12月	2年次海外校外学習 初の分散実施 (オーストラリア、台湾、インドネシア)
12月	ACCU 「ESD Rice Project ワークショップ in アユタヤ」教員参加
1月	「国際的な視野に立った卒業研究支援プログラム」生徒・教員がアメリカ渡航
1月	日本教育新聞に本校のESDの取り組み記事が掲載
1月	ロンボク・マタラム第一高校 (インドネシア) 短期留学生来校 (1週間)
1月	JICA 主催「JICA 高校生エッセイコンテスト」入賞
1月	世界銀行主催「第4回中高生開発援助標語コンテスト」入賞
2月	「国際的な視野に立った卒業研究支援P」生徒・教員がタイ&シンガポール渡航
2月	第17回総合学科研究大会 (本校主催) 生徒・教員発表 (分科会C「総合学科におけるESD (持続発展教育)・国際教育」)
3月	H26年度海外校外学習交流校視察・打ち合わせ (台湾・インドネシア) 教員派遣
3月	1年生1名ニュージーランド留学へ (1年間)
3月	福島県のBritish HillsにてEnglish Camp実施 (1・2年次生希望者)